

『理趣経』

松長有慶著／中央公論新社

この執筆依頼を受けた後、「ブックガイド」が実は学外からも読める様になっていると判って、正直困ってしまいました。なぜなら、私が感銘を受けた本は、学生時代に読み漁った松長有慶氏をはじめとする諸氏が執筆される経典や宗教の解説書だったからです。私自身は、随筆を含む文学小説や実写映画は苦手というより大嫌いな部類に入ります。それは、あまりに理想的な世界であるため、「そんなことあり得ない」と思うからです。小・中・高等学校と、一番嫌いな宿題は「読書感想文」でした。毎度、夏冬の宿題時には「読書感想文」を巡って大喧嘩をしていました。文学小説を読むよう勧める母とそれを完全に拒否する娘。今思い返しても不思議な光景ですが、良く考えてみると我が家の書棚には殆ど本がなく、あったとしても六法全書やその類のもの、あるいは歴史解説書ばかりだった様な気がします。基本的に本は図書館で借り、唯一増え続けた蔵書は「楽譜」だけかもしれません。マンガすらない状態でした。なので、普通の本を買おうなんて思いもしませんでした。

その私が唯一はまったのが、仏教そのものや経典の解説がなされた書物群でした。私が大学2年生の頃です。当時の私は様々な事情があって、若者が一度は出会う精神状態に陥っていました。そんな時に会ったのが経典の解説書でした。それまで経典と言えば祖父の法事の際に読経していた観音経しか知らなかった私は、松長有慶氏の「密教」という本を皮切りに、数十冊の解説書を漁りました。殆どを自宅においてきたため、今手元には松長氏の「理趣経」しかなく、他の本と併せて細かい話をしようとするのが難しいのですが、確か初めて読んだのが講談社新書から出版された「般若心経を読む」ではなかったかと思います。

それらの書物にしたためられている、記憶に残っている要素がいくつかありますが、その中でも特に心に残っているのは生きていくための“智慧”を身に着けること、そして“私たちは生かされている”という認識です。“智慧”の理解は大変難しいですが、辞書によれば「物事をありのままに把握し、真理を見極める認識力」とあります。“生かされている”という認識は、人生において傲慢になることなく常に謙虚に、ということでしょう。

当時は、漠然と「そうなんだ」と思いつつ、ある事象との出会いを境に立ち直り、

現在に至ります。そして、1年程前、学内でのふとした会話で、何故か私は理趣経、という単語を再度発しました。めづらしいこともあるものだと思います、今回の執筆依頼を受けて改めて松長氏の「理趣経」（中央公論新社版）を開いてみました。普通は冊子で読むものですが、なぜかこの版は電子書籍でも販売しています。世の中便利になりました。

経典、というとは何か怪しいのですが、この本は全部で7章から構成されています。第1章に理趣経とはどういう経典か、という解説がなされています。高々数十ページですが、第1章を読むだけでも大変興味深いものとなっています。はじめに述べられていることは「思想と実践の一体」。学ぶことと行動することは一体で、これがなければ何も始まらないそうです。次に「秘密」の本来の意味。順序を踏まずに学ぶと、理解不足となり、時として最悪な結果を招きます。故に、段階を踏んで伝えることは重要であると説かれています。少し飛んで、「慈悲」という愛の形。自らを減する形で相手をいつくしむ。そこには自己都合のない純粹な“愛”が必要と説かれています。実はここまでで、経典題目の解説でしかない、というのが驚きですが、読者としては何かいいものを聞かせて頂いた気持ちになります。そして欲と生命の関係。生きていく以上、欲を悪い方に使うのではなく良い方に積極的に使おうということの様です。そのプロセスで必要となるのは、恐らく“智慧”や“生かされている”という考え方でしょうが、それらをわきまえた上での欲はなんだかよさそうです。

ざっとこれらのことをまとめて、松長氏はこの経典の意味する所をきれいにまとめ上げています。彼の本に記載された文章をそのまま引用しますと、「人間の持っている最も根源となるバイタリティそのものを、押さえつけるのではなく、生かして、正しい道を教えることによって間違いのない方向で引っ張っていかう」というのがこの経典の意味する所でしょう、と第1章を締めくくっています。

ここまで書いて、私はふと振り返りました。私たちは普段、工学の中に身を置き、あるいは教員として教育の中に身を置く形で生活をしています。思想と実践の一体や秘密、慈悲といった考えはまさに“学び”や教育に対する心構えそのものです。欲と生命の関係、これは、ある意味、工学（だけではありませんが）に通じる所

もあるでしょう。1998年に出されたある文書の中で工学とは、「・・・公共の安全、健康、福祉のために有用な事物や快適な環境を構築することを目的とする学問」と定義されています。皆が幸せになれる様なものを生み出すことを“欲”だとするならば、それを実現するのは欲の積極的利用でしょう。そして、工学に従事する以上、本来の“智慧”、すなわち“真理を見極める認識力”も必要になってきます。さらには、工学は人の幸せを願うものであると同時に“なんでも実現できる道具”として扱われてしまいがちです。そうはならない様、おごらず、常に謙虚な心でいることも大切でしょう。以上を振り返りますと、経典そのものの中にも技術や教育に従事する者の心構えが何と多く書かれているのだろう、と、本に出会って十年経過の後、改めて感動しました。

こう考えると、一見怪しそうに見える経典解説書であっても、「良い（ここが大事です）」解説書であれば立派な読書だな、と思いました。かつ、この経典は本来であれば大変難しいものらしく、とても凡人である我々には理解できないものの筈なのです。それをここまで判りやすく解説された著者も素晴らしいと思いました。まさに、「思想と実践の一体」を重ねられた方ならばこそその所業だろうと思います。その意味でもなかなか良いものではなかろうかと思いました。生きることに疲れたら少しだけ開いてみるのもいいかもしれません。

執筆者紹介

中平 勝子

経営情報系助教。専門領域は、教育工学、情報学基礎。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『理趣経』松長有慶著 中央公論新社（中公文庫ワイド版） 2004年 品切

ブックガイド目次へ